
猫又と俺

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又と俺

【Zコード】

N1631V

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

中二で受験生のおれは、お祖母ちゃん家で従兄弟たちと肝試しをすることになる。

あぶれたおれは一人で向かうが、そこには可愛い（自称）の猫妖怪がいたのだった。

おれの運命はいかに・・・。

肝試し

「孝之、早く行けよ」

「だ、だつて、真は舞だし、櫂は正兄と一緒に。なのに何でおれは一人なんだよつ」

「そうだ、ずるいじやんかとおれが指摘するが。

「だつて五人しかいないんだからしようがないじやん」と軽く真にいなされた。

「舞を一人で行かすわけには行かないし、櫂はちびっこだしよ」

高校生の正兄が淡々と言うのをいつも子ども扱いすると激怒する櫂がうんうんと頷きながら正兄のTシャツの裾を握りしめていた。それがなんとも腹が立つておれは猛然と反撃する。

「知ってるぞ、真は舞のこと……」

「うわああああああああ」

同じ歳の従兄弟の真が大声で叫び、血相を変えておれに向かって来た。首を押さえこまれて窒息しそうになる。

「や、やめろつ、止めねえとぶつ飛ばす」

本格的に戦うつもりになつたおれの耳に真が囁いてきた。

「ほんと、頼むよ。マジで俺さ……」

真のその切羽詰まつた感はもしかして真、おまえ。

「マジで？ 舞に告るの？」

「つそり聞くと「うん」と真が頷いた。

そ、そういうことなら協力することはやぶさかじゃない。俺と真は中学三年で、本当なら田舎に帰つてる場合じゃなかつた。しかし、田舎の旧家である父方の家には毎年お盆に帰るもの なんていう悪習が続いている。

中学生にもなれば、田舎なんて結構めんどくさなものだ。特にお盆とか、法事だとかは遠慮したい日ランキングの一位と一位をあらそう程だ。顔も覚えてないような親戚のおばさんやおじさんなど

つつかまつて話の相手をさせられる悲劇が待っている。

だが、それよりもっと嫌なのが誰かが連れて来た『どつかで血が繋がってるらしい子ども』と言つ名のガキどもだ。

グズるガキの親は簡単に自分の可愛い「じども」をおれに丸投げしゃがるのだ。

「まあ、ちゃん、お兄ちゃんに遊んでもらいなさいねえ
おれのことじとじまで知つてんだよ。おれがもしすつげー凶悪な
やつだつたらどうすんだよ。

嘘だろ……やう思つおれにガキはこやりと不敵な笑いを向けてくるのだ。

「お兄ちゃん、遊んでね」

それからはひたすら『どつかで血が繋がってるらしい子ども』さまの奴隸と化すおれ。わがまま放題のガキが帰るまで必死で耐えるしかない。なにしろ正月に会つた時の「お年玉」という人質を取られているのだ、仕方ない。

そういう訳で毎年田舎には帰つているわけだが、この先従兄弟同士なんか集まることもどんどん無くなる気がする。前から真が舞のこと好きなのはなんとなく分かつていたので眞の気持ちは応援したい。

受験生つてことでまさか今年は無いだろ?と思つていたら「じーせ私たちがいなくなつたら勉強なんかしなくなー」と問答無用で両親に車へ連れ込まれた。

そういうわけで今年もおれたちは全員集合してしまつたがきっと眞には最後のチャンスに思えていたのだつ。

だけど、もう会わないのなら今更言つても仕方ないんじゃあ?
そもそも思つし、肝試しで告るか、ふつー?

ツツ「ミたいことは数々あれど、まあ眞の青春の思い出の手助けになれるのならまあいいかと思つていた毎回のおれに一言言いたい。

「おれのバカ野郎」

おれより一つ上の正二三つ下の耀は兄弟で俺の親父の兄貴の子だ

もだ。同じ歳の真は同じく親父の姉貴の子。舞は親父の妹の子

ども……年が近いせいで小さい頃から田舎に帰れば仲良く遊んだ。

その五人がなぜこんな懐中電灯の光の届く範囲しか見えないなん
ていう場所に突つ立つていいのか。それは眞の言った「肝試し、
しようぜ」というあまりにもべたな提案によるものだつた。

夏だ、田舎だ、肝試しだ。なんであの時あんなに盛り上がつた
のかが謎だが、その時は確かにみんな……おれもノリノリで賛成し
ていた。

だが言つておくがおれはバリバリの都會っ子だ。夜がこんなに
暗いなんて知つてゐるわけがない。今までは夜はみんなで夜通しト
ランプなんかをやつてたせいで田舎の夜を見ぐびつていた。
家の農機具が置いてある納屋の前から続く細い道を歩いていくと
道が三本に別れている。

その先にそれぞれお地蔵様の祠があつて、昼間、家にあつた割り
箸の刺さつたナスビだのキユウリだの持つてきて祠に置いていた。
それを取つてくれればいいルール。簡単だ。家の敷地からそんな
に歩くわけじゃないし、取つてくるのもナスビか、キユウリだ。
そう思つていた。簡単だつて……そりや昼間ならな。

「真つ暗だな」

「おお……」

「こくんと誰かが唾を飲み込む音が聞こえてなんだか雰囲気満点に
なつてきていた。

「行こうか、舞」

「う、うん」

びびりまくつたはずの眞がぐつと懐中電灯を前に突き出し、反対
の手を舞に差し出した。

「おお、やるじゃん、眞。

しつかりと手を握り合つた二人が歩き出す。ああ……あれが世
に言う『吊り橋効果』つてやつ。案外上手くいくかもなとなんだ
かほつこつしながら一人の背中を見送つて。ついでに正兄がセミ

の幼虫と化した懼を腰にひつ付けたまま歩くのを見て噴き出した。

「大変だなあ、正兄」

ところが懐中電灯に照らされた光源から出た途端、一瞬で彼らの背中はかき消すように消えてしまった。

笑っていた口が閉じるのを忘れて固まっていた。おれは重大な事に気づく。

「おれ、取り残されてんじやんつ」

果てしなく真っ暗な中、おれの持った懐中電灯の明かりに一対の目玉が反射した。

あれなんだ？ 狼か？ 虎とかライオンだったりしたら……。
あんまりの怖さにここが日本だかサバンナだかジャングルなのか
も分からなくなっている。

しかしここでみんなの帰りを待つわけにもいかない。 本当はそ
れに諸手を上げて賛成したいんだけど、おれの中にある小さなプラ
イドつてやつがそれを許さない。

「くつそ、おれが一番最初に戻つてやる」

とにかく今は何でもいいから目標を作つてそれに向かつてがむし
やらに進むしかない……つて、マジで受験生みたいなセリフだよな。

「あ……みたいなじやなくて受験生だった」

あやうく迫りくる現実にいきなり潰されそうになる。 閨はびい

にでもある。例えば受験の闇つてやつ。

つかつか、自分で言つてへこんでしまった。

落ち込んでる場合じゃない。 すんでのところで踏みどぎました
おれは、たぶん客観的に見てもすこくへつぴり腰で目的地に向かつ
た。

孤独な生活は独り言が多くなる 知言だ。 まさに今のおれだ。
おれは今、すっげー孤独で。 だからでかい声で独り言を言つても
全然おかしくない。

「足に纏わりついているのは変な触手じゃなくてただの葉っぱだ
よな」

声がやけに響く気がする。

「今顔に触ったのはゾンビじゃない、ただの木の枝だつ。分かつて
んだよバーロー」

よし、その意氣だと自分で鼓舞する。

「そして肩をとんとん叩くのは……叩くのはえつと……なんだ？」
理由が思いつかなくていいきなりパニッシュになりそうになつた。

ええとええと……何でもいいから思いつけ、おれ。

「肩叩かれてんだつたら誰かに呼ばれてるんじゃない？」

「ああ、そうか。そうだよな。サンキューって……」

なんでおれ誰かとしゃべつてんだ？ そう思つた途端に膝がぐら
ぐらと操り人形のように頬りなくなつた。

今のは誰？ いや、言わなくていいし。人間知らないほつがいい
こともあるらしいしな。

ここはきつぱりとシカトするに限る。

「なあ、さつきから呼んでんだけど」

知らん、知らん。

「おいつてばあ」

その言葉とともにおれの顔のまん前に現れたのはおれと同じかち
よつと下ぐらいの女子だつた。

「わわわわ」

悲鳴を上げた途端に頭を引っ叩かれた。

「失礼なやつちやな。こんな絶世の美少女目の前にして何が「わわわ
わ」だよ、このドアホ」

恐ろしく口の悪い自称美少女がにんまりと笑いながら俺を見る。

オカマで豚でイタチ

「怖いのかよ、 またか」

「こ？」

怖いよ、 絶対おまえ人じやないもんつ。 僕は心の中心で叫んでみた。

だつておまえ尻尾があるじやんつ。 そつ黒づがそこはそれ、おれにも男の意地つてもんがある。

「こ、怖いわけあるかよ、 ばっかじやねえ」

「バカとはなんだよ」

おれのハリボテの虚勢の言葉を聞いて、 急に自称美少女の瞳孔が小さくなつて口が耳まで裂けていく。

「さやああ」

つてこれなんだか前にもやつたような展開……。

「失礼だと言つたよなあつ」

鮮やかなカウンターパンチがおれをマットに……こや、 地べたに沈めた。

「うげつ」

いやもう美少女じゃなくて化け猫だよ、 化け猫。 …… つてそつかおまえ。 片方のほつぺたを地面につけたままおれは声を上げた。

「おまえ化け猫…… なのか？」

「アホ」

「え？ 違うの？」

自称美少女はだんつと足を踏み鳴らして俺を睨むと一気に話しだす。

「俺さまは猫又って言つんだ。 そんじょそじらの化け猫と一緒に入るんじゃないつ」

どうだと言つ顔で猫又はおれを見るが、 そんじょそじらの化け猫と猫又の格の違いなんておれには分からん。 知つてたら変だろ、

逆。た。

「あのや、どう違うの？」

「これは素直におれは『王立ち』している猫又に尋ねた。

おれの問いに、しゃあないなあと言いながら猫又は自分のスカートをめくつて尻を探つる。言つとくが絶世の美少女は人前でそんなことは絶対しないからな。俺の血の叫びなど知るはずもなく、猫又は何かを手前に持つてくる。そして、ほれと言ひながら尻尾を両手で一本づつ持つた。

ゆらゆらと意志があるみたいに握られた先が揺れている尻尾が確かに一本。

「尻尾が一本……？」

「そういうこと。これで分かったる」

白襦袢に両手で持つた尻尾を振る猫又を前におれは「何で尻尾が一本ならず」といのがが分らん」という根本的な質問をできぬいでいた。

とりあえず、すごいのだ。それでいいじゃん。格好いいよ、それ。じゃあ、おれは忙しいのでこれで……。

この作戦はどうだ。いやこれしかない。

「すごいな、格好良いよ、うん。じゃあおれ、忙しいから先行くな」

そうだ、こんなところで足止めされてる場合じゃない。起き上つたおれに猫又が聞く。

「おい、おまえあの祠に行くなもりなんだろ？」

「え？ ああそうだけど」

だつてナスビ取りに行かなきや。そう思つたおれの肩を猫又の手が引き戻す。

「今日行くなら絶対俺さまを連れて行け」

なんでだよ、冗談じゃないと手を振り払おうとするが猫又の手はがつしりと肩に食い込んで離れない。

「放せよっ」

「おまえ、死ぬぞ」

肩越しに耳元で囁かれた言葉におれは即死 はしなかつたが、心臓が止まるくらいびっくりしたのは本当だ。死ぬって？ ナスビ取りに行くだけでなんで死ななきやならないんだよ。

「今晩はおまえどんな日か知つてるのか？」

猫又が手を腰にやつてこっちを窺う。

「お盆つていやあ、仏様が帰つてくるんだろ？」

猫又がばしつと小気味の良い音をさせたが、その音源はおれの頭だ。おれの頭をさつきから木魚みたいに叩きやがつて。今まで覚えてた英語の単語が耳から出て行つたのは絶対このせいだ。

「これだから最近のガキは

どこのおっさんかの言葉だと思ひよひつな咳きを漏らして猫又が天を仰ぐ。

「もう釜蓋かまぶた朔日つげのひは過ぎてる。とっくに地獄の釜の蓋は開いておまえの先祖さゆきさまはお前ん家に帰つて来てるんだよ、この不孝行者ふこうぎょうしゃがつ」

「か、オカマで豚でイタチつて何？」

ああ言わなきや良かつたよ。瞬時に分かることがある。それが今だつてもう猫又の顔を見ただけで分かつた。じりと猫又が踏み出す。同じだけおれが後ろに後退する。

「……い、今のは冗談だからつ。おカマなんとかつてなんでしょうか？」

今のは丁寧語になつてる？ とりあえず「お」か「！」を頭につけて、ですます言つとけばいいんじゃなかつたつけ？ まさか自分がそれだけ言葉づかい荒いんだからおれの言葉づかいにこだわらないよな。

そう心配しながらおれは猫又の目……は怖いので口元付近をちら見した。

「このあんぽんたんつ」

一喝されたが、意味が分らないのでこれは怖くない。

「地獄の釜の蓋つて意味の釜蓋かまぶた、盆が始まるのは本来は一日からだ。

その朔日ついたちで釜蓋かまぶた朔日ついたちといつんだ」

ここまではついて来てるんだろうなとさく先生氣きの猫又がおれを見た。

分かつてゐるぜ、先生。いつもの「分つてから当てんじゃねえぞ」光線をおれが向けると猫又はふんと鼻を鳴らしたが話しを進めた。

この視線は塾じゅくでは結構効果あると思つてたけど妖怪ようざいに対しても有効なのを今知つた。知つたからつて他に使い道があるわけじゃないんだけどさ。

「今日は先祖せんそが帰る日なんだ。釜の蓋ふたが閉まる日なんだぞ。ここらで蓋ふたが空いてるのは今年はあの祠しなんだ。ただの人間ひとがひょこひょこそこに行つてみる。巻き込まれておまえも一緒にあの世行きだ」猫又の話におれは知らないことはいえ、命をかけた肝試かんししをしていたことになる。

「止める、止めるよ。教えてくれてサンキュー。おれ家に帰るわ」ナスビ一本と命を秤にかけられるかつていうんだ。踵きびきを返したおれに「待てよ」と厳しい声がおれの足を止めた。

ナスビの救出

「おまえの家の先祖は乗り物が無くて帰るに帰れない。おまえらがお供えの、「精靈馬」（じゅうりょうづしま）を持ち出したからな」「しようじょうづしま？」

「おまえらが三つの祠に毎晩持つて行つたろ、割り箸を刺したナスビやキユウリを」

持つて行つてた けど。

「それはただのお供えじゃない。キユウリは馬だ。釜から出たときには家に帰るときに使う。早く家に帰れるようにな。だが、キユウリはもう使わない。

今日は帰るときだから。ゆっくり帰ることができるよつて使うのは……」

「もしかしてナスビ？」

「もしかしなくても、ナスビだ。牛になつて先祖を運ぶはずだつた嘘……そんな意味があるなんて。ちつとも知らなかつた。つてことはおれがナスビを持って帰らなきや死んだ爺さんだか、婆さんだかはずっと家にいなきやならないつてことか？ でも、いてても何も感じなかつたわけだしわざわざ帰らなくてもよくな?

「居たらまずいかな、やつぱ」

言つた途端にスパークと横つ面を張られた。今回も迷いの無い、良い張り手です猫又サマ。

「このドアホ。今日中に戻れんとおまえの先祖は悪霊となつておまえの家に取り憑くんだけ。分かつたら俺さまと行くのか、行かんのかはつきりしろ」

「……じゃいくよ」

「声が小さい」

「行つたろうじやないか、ナスビがなんぼのもんじやああいっもう何に対するのシユプレヒコールなのかも疑問だが、こうして

おれの決死の肝試しが始まつた。

暗さにも種類がある。歩きながらおれはそんなことを考えていた。

懐中電灯の明かりが丸く照らす境界とそこから離れた場所。闇の中にもう一つ闇があるかのような墨一色で塗りつぶされた空間。そこは音さえも迷い子になりそうな異界だった。

昼間に見える風景と夜に見る風景。同じ場所なのにそこはまったく違う空間のようであるで見覚えが無い。暗く足元がおぼつかないせいで距離感までおかしくなっていた。

「あれが祠だ」

前を行く猫又の声に向けて顔を向けると、そこに広がっていたのは信じられない光景で。小さな木造の祠。その観音開きの扉が全開になつていて。そこから青白い光が間欠泉の噴出のように勢い良く溢れだしていた。

そこにいくつもの人影が次々と入つて消えていく。

「おまえ、光に触れるなよ。引き込まれるぞ」

あまりの光景にその場に突つ立つていたおれの手が道の脇の低木の茂みにぐんと引っ張られた。

「なあ、近くにある祠は大丈夫なのか？」

おれは急に真や舞、正と櫂の兄弟のことが心配になつてきた。

「ここいら辺で蓋が開いたのはここだけだ。なあ、おまえに頼みがある」

「頼み？」

低木の茂みにしゃがみ込んで様子を窺つていたおれの横で猫又が言いにくそうにそう言った。

「なんだよ、頼みつて？」

おれの問いに猫又はうんと言つたまま暫く無言だった。言つか、言つまいか。隣でそんな葛藤を繰り広げているらしいことが猫又の表情にありありと浮んでいて、おれは思わず噴きそうになる。「言つてみろよ、おれができる」とならやつてやるか

「そ、そうか？」

ぱつと猫又の表情が明るくなつた。なんだかおれまで嬉しくなるような笑顔。

そんな顔を見ちゃうと手伝いなんてお安いことだと思つてしまつた。

「んじゃさ、俺さまが合ひ図したやつを呼びとめてくれ。釜に戻ろうとする靈を止めるには人じゃないと無理なんだ」

頼みの言葉なのに『俺さま』と偉そつなのは気になるが、それよりそんな簡単なことを今まで悩んでいたなんて。

「いや、それ全然オッケーだけど」

おれの返事に盛大に息を吐き出した猫又は身を乗り出して祠に向かう人影をチェックしだした。あんまり熱心に見てくるからあまり水は差したくない。

だけど言わなきやならないことがある。

「付き合つのは夜明けまでだぞ。おれだつて日が昇るまでにナスビ持つて帰らねえと祖母ちゃん家が化け物屋敷になつちまうんだからな」

聞こえてるのか、いないのか。 猫又ははいはいと言つて呑み

本の尻尾を揺らしただけだつた。

初めは誰が誰だか見分けがつかない影のように見えていたのに、猫又の隣で祠に入つて行く靈たちを見ているとなんとなく顔つきが分かつてくるから不思議だ。

「誰を待つてるのか、聞いてもいいか？」

「もう聞いてるじゃないか」

まあそなんだけどさ。

顔は道に向けたまま、猫又が「俺さまの飼い主」そつぽつりと言つた。

「そ、そっか……」

改めて猫又の横顔をまじまじと見てしまつ。 そうだよな、こいつは猫の妖怪だった。元は猫なんだ。

そこでちょっと疑問がわく。 一体どのくらい先祖つて子孫のところに帰つてくるもんだろう? ひい祖父ちゃん、祖母ちゃんくら

いならわかるが原始時代とかだったらどうなるのか。 祖母ちゃん

家はきっと靈魂でぱんぱんだつたはずだ。

だけど、猫が妖怪になっちゃつくらいの年月が経っているんだろうう。

「なあ、死んだ人はいつまでこっちに帰つて来るのかな？」

おれの問いに猫又は「覚えてる人がいるまでに決まってるだろ。

会いに来るんだ、ただ闇雲に帰つてくるわけじゃない」そう答えた。

「じゃ、じゃあさ、猫又の飼い主つて……」

もう帰つて来れないかも知れない。 そう思つたけど……言えなかつた。

「なんだよ、途中で止めるな

「う、うん……」

妖怪になるくらい飼い主を待つっていた猫又の気持ちを考えると、おれはただ飼い主の姿を捜す後ろ姿を見ることしかできない。

つていうか、そうなるとおれは日の出までここに居なくちゃいけないのか？

「それはまずい

おれは祠に目を向けた。 扉の内側に祭壇があつてそこにはぼつんと割り箸が刺さったナスビがひつそりと置いてあつた。

手を伸ばせば、いけそうな気がした。 ちょっとがんばればいいける、そう思う。 こつちの用をさつと済まして猫又にぎりぎり付き合つてやればいい。

おれは四つん這いのまま後ろに下がつて低木の茂みから這い出して、腰を低くしながら祠に向かつた。 細長い草が足にびしひじと当たつて痒いがそんなことは言つてられない。

ぎりぎりまで近寄つて光に触れないように慎重に手を伸ばす。もう少し、もう少しだ。 紫のナスビに人差し指が触れる。あとちょつと……。

そこにぶわっとぬるい風がおれの頬を掠めた。

「なんだ、一体？」

一瞬、集中が途切れてしまう。はつと思つた時には腕が靈体の一つに拘まれていた。恐ろしいほどの力でおれは祠の中に引っ張られる。

花柄でレース付き

それは言つなら、まるで飛行中の飛行機のドアが開いたみたいに体が気圧の違いによつて飛ばされるくらいの強い力。

だけどそんなつ。このままこの中に入つてしまつてことは黄泉の世界に行つてしまつてことじやないか。

嫌だ、そんなのつ。『冗談じゃないつ。

咄嗟に掴んだ祠の扉にしがみつく。だけどそんなには持ちそつ

にない。

「猫又つ！ 助けてつ！ 猫又つ」

おれの必死の叫びに今まで大人しく列を作つていた靈魂たちの様子が変わつていいく。半透明のトレー・シングペーパーに描かれたようだつたのに、実体の色が見る間に彩色されていく。

「手に掴れつ。片方の手をそこから放せつ」

飛びこむように跳躍してきた猫又が手を伸ばす。その手を掴もうと思つているのに、今にも吸い込まれそうな力におれは怖くて手が放せない。

指が硬直したみたいに硬くなつていて。

「できないつ。どうしたらしい？」

おれの悲鳴混じりの声に猫又は大きく舌打ちして一本の尻尾を腕のように俺の脇の下に潜らせた。

「おまえ名前なんだ？」

今それ聞きますか？

「た、孝之つ。丘野 孝之つ」

「手を放せ、孝之。目を閉じてこちらに跳べ」

飛ぶ？ 嘘だろ？ 普通の人間はアニメの世界ほど運動神経がいいわけじやない。 映画やアニメのよつなアクションをやろうしたら百人中九十九人が死んでるはずだ。

「このアホんだらつ、早く跳ばんかいつ、このビアホがつ」

容赦ない猫又の声で靈たちの「わめき」が大きくなつた。ぐんぐんとたくさんの腕が伸びてくる。早くしないといつらに引きずり込まれる。おれは蠢いている靈の頭を足がかりに決死の覚悟で手を放して飛び上がつた。

アニメのように。映画のように。神様、お願いつ。

しかし当然華麗に何メートルも不安定な場所で飛び上がれるはずも無く。

現実は、墜ちる寸前に猫又の腕と尻尾に助けられたというお粗末な結末。いや、助けられたのか?

草の上に引きずり戻された途端にoreの言葉は途切れてしまつ。「あ、ありが……つ 痛えつ」

「この腐れガキがつ」

たつぱりと力ののつたパンチがあれの頬に飛び、おれは踏ん張り切れずに尻もちをついた。猫パンチってこんなだつたか?

世の中の猫耳ファンのオタクたちよ。ほんとの猫耳女はこんなに恐ろしいバンタム級もびっくりのパンチを打つんだぞ。

「ニヤンニヤン」なんて可愛く言つたりしないんだと知つてるか?この問答無用の暴力におれは抗議した。

「何しやがるつ、痛えじやねえかよ」

「当たり前だ、痛いようにやつたんだからな」

なんだよ、おれはただ。猫又のために……そう思つたことは本当だけど、いちいち言つのもなんだか言い訳っぽくて話せなかつた。

「ごめん」

一人で勝手なことしたのはやっぱおれが悪い。そう思つて謝罪すると「ちつ」という大きな舌打ちが聞こえた。

「仕方ない、おまえのナス取ってきてやる。その代わり俺さまの飼い主が現れたらちゃんと声かけろよ」

「あ、ああ」

返事をしたのはいいが猫又の飼い主つてこいつにはもう帰つて無

いんじやない？ よしんば帰つていたとしてもおれは顔知らない。

「どんな人か知らないんだけど」

「俺さまの飼い主は良い奴だつた。優しくて頭を触る手がぬくくて。

気持ちの良い声だつた」

「ちょっと、ちょっとと待て。

「そんなことで分るわけないだろ。知りたいのは外見だ、外見」「外見……」

そこで猫又が凶悪な顔でおれを見た……？ いや、もしかしてこれは困つている顔なのか？ まさか、まさかとは思ひが……。

「おまえさ、まさか」

「顔は覚えてない」

「うつそ～っ。どうすんだよ、おい。 そう思つてゐるおれの横で猫又は「くつそ」と言いながら地面を蹴りつけた。

「やつぱり外見つて必要かな」

必要に決まつてんじやん。

「どうやって探すんだよ」

「フィーリング？」

言葉の最後にはてなをつけんじやねえつ。 こいつは大変なことになつた。 頭を抱えるおれの前でぐんと前傾姿勢になつた猫又が勢いよく祠に走り込んで行く。

「猫又」

眩しい光の中、たくさんの手がそれに反応して掴みかかつてくる。おれは見ていられなくて猫又の後を追つた。

「来るなっ」

吐き捨てるよひに猫又はそつとナスを掴んで開いた祠の扉を両足で蹴るとくるりと宙返りして光から逃れた。

それはもう見事と言ひしかない。 あつと言ひ間の出来事だつた。さすがは猫というべきか。 しかしくるりと回つた時にパンツが丸見えになつていたことは黙つておこうとおれは思つた。レースがついたラブリーな花柄だつたですが……これは、ひつそ

りとおれの心のライブラリーに入れとくことにした。猫又に言って何されるか試すようなスリルを楽しみたいわけじゃない。

「こいつは先に家に返そう」

猫又の言葉におれはえっと動きが止まる。そんなことしてたらいるかもしぬない飼い主に会えないかもしぬないじゃないか。

「だけど家まで戻つてたらさあ……」

「家まで戻るのはこいつだけだ」

へ？ 文字通り固まつたおれの前で猫又はナスに話しかけていた。「おまえ、こいつの連れと一緒に家に帰れ」

お~お~い、何言つてんの？ いくらなんでもナスビは返事しないだろ……。そういうのちょっと痛いんですけど……。

ところが、ところがだよ。ナスビは返事をするみたいに頷くと地べたに降ろされた途端に割り箸を交互に動かしてよたよたと歩き出したではないか。

「うそ……」

うそ ジやないかもしないけど、このナスビが「一緒に帰ろうぜ」って言って果たして真たちが仲良く受け入れるとは思えない。

ぴんときたら・・・

「あのせ、」れつて無理あるよな

「何で？」

「だつて、こいつナスビだぜ」

「そんな事知ってる」

「だつたら……」

「あのさ、ここのままな訳ないだろ。もつ少し見てるマヌケ

「マヌケって」

言い返そうとしたおれの視線の前でナスビの姿は身知ったものに変わった。前髪が長めのちよつと猫背で足を引きずつて歩く癖おれだ。いつも母親に注意されていたが、やっぱ変だ。人の意見は素直に聞いたほうがいいとおれはちよつと反省つてもんをした。

「つーか、なんでおれ？」

「おまえだよ」

「おれじやん」

「なんで？ そんな気持ちが顔に出ちゃってたのか、猫又は「めんどうきさい」そう言いながらも説明してくれた。

「これから朝までここにいるんだろ？」だつたら戻つて来なかつたら連れが騒ぐじゃないか。だからナスビに頼んだ。それにナスビは一人じゃ家に帰れないからな。人についてもらうつてことで、一石二鳥なんだ。了解？」

「りょ、りょーかい」

ひょこひょこ歩いていくおれ、もといおれの格好したナスビを見ながらみんなおれだと思つて仲良く家に帰るのかなと寂しくなつた。

おれよりナスビのほうと話しが合つたりしたらへこむ。いや、ばれて欲しいわけじゃないけど。

つて、なんでおれナスビ相手にこんなにたそがれてんだ？

「おい、何たそがれてんだ」

猫又にそう言われてやつぱりたそがれていたんだとまた落ち込んだ。だが、このまま落ち込んでいる場合じやないよな。

「見つけよつぜ、飼い主」

おれの言葉に猫又がうんと返事を返して笑顔になった。「うえつ、なんだよそれ。普通の女の子みたいじやないか。急になんだか顔が熱くなつてしまつ。

「おまえ、猫又のくせになんだよ今の。『氣色悪つ』」

「つるせこつ。猫又のくせにはなんだつ、孝之のくせはなんだとおつ」

「なんだとおつ」

大声を出してみたが、孝之のくせに「どういう意味だ?」べつにおれは孝之なんだからいいじゃん。

いや、良くない? そんなことを考えていたら後ろ頭をぽかんと猫又に叩かれた。

「これでおまえの心配」とはなくなつた。気合を入れて見つめ、「

「う、うん」

答えては見たものの、フイーリングだぜ、フイーリング。どうしたらいいのかおれは途方にくれた。

どんどんと行き過ぎて行く仏さんの行列の中にピンとくる人も、知り合いもいないまま時間だけが過ぎていつた。

「なあ、おまえ飼い主探すのってどれくらいやつてるわけ?」

おれの問いに猫又は「初めてだ」と応えた。

「初めて?」

なぜなんだ? もつと早くから探していたらヒツヒツに見つかっていたかもしねないのに。

「なんだよ」

「いや、何でも」

ぶすつとした顔で猫又は小さい子がするみたいに膝を抱えた。膝がしらを持つ両手に筋が立つていて、何かに耐えているみたいにおれは感じた。

「 言いたくなかったらいいけどさ。何か理由とかあるの？」

「 別に」

「 本当に?」

「 しつこいつ」

いでつ！ かわす暇も無いほどの華麗な右フック。身体の回転を上手く使つた良い攻撃だ……なんて、解説にでも徹しないと反撃したくなるようなパンチにおれは頬を押えた。

暴力女。いや、暴力猫？ いやいや暴力ばかの化け猫め。

もう絶対可哀そうとか思わないからなつ。くそつ。そう思ったおれはふんと視線を祠に向ける。

それからはずつと無言だつた。靈たちは音を立てない。だから聞えてくるのは虫の鳴く声や牛ガエルの低い齧すみみたいな声しかない。祠から漏れる光しか光源は無くて。

ここに生きているのはおれだけなんだとふと思つた。あ……妖怪って生きてる？ 良く分らない。

妖怪になるつて何かきっかけはあるんだろうか。猫だつて飼い主に可愛がられて死んだのなら成仏するんだろう。

ま、どうでもいいけどさ。自分にそう言い聞かせておれは目の前の物に意識を集中しようとする。

だけど、何を見ればいいのかも分らない状態じゃ緊張感なんて続かない。

草の青臭い匂いがやけに鼻につく。丑三つ時つて何時のことだつたろう？ 人間以外の生きものや魑魅魍魎ちみもうりょうが勢いづく時間。それが今 そんな気がした。

「 なんだ、あれ……」

黒く蠹ういくものが靈たちの後を歩いて来る。夜の闇よりもなお黒い。夜に溶け込みそうな色のくせして、あまりの禍々しさに目を逸らせない。そんなものが……。どきどきしながらそれを見ていると黒いものがぐぐつと体を伸ばした。

あつと思つ間も無く前を進んでいた靈を飲み込んでそれは蠕動運

動するみたいに上下左右に触手を動かしている。逃げなきゃやば
いって。猫又にそう言おうとして横を見ると、猫又の目がきらり
と光っていた。

終わらない災難と樂しい毎日

「見つけた」

立ち上がった猫又の言葉に俺は驚く。

「見つけたつて……あれ？」

うんと猫又は俺を見た。

いや、できない。ふつうできないだらう。あいつ、今靈を喰つたんだぞ。そいつを俺が呼びとめる？ できるはずない。つていうか、優しくおまえの飼い主つて……人間じゃなかつたのか？

「な、なんて言つて呼びとめるんだよ……つて、無理だから」

「しなきゃ全部喰われてしまつ。注意をこっちに向けるだけでいい。後は俺さまに任せろ」

つて、どうことだ？ オマエのやりたいことって？

「おまえの目的つて優しい飼い主に会いたいってことだつたんじゃないのかよ」

「違うつ、俺さまの目的は悪靈と化した飼い主の肅清だ」

「肅清？ つて……」

「ぎりぎつまで待てよ。祠の間際まで来たら何でもいいから声をかける」

ターゲットの方から田を離さず、猫又はじりじりと祠に近づく。尻尾がぴんと立ち上がつて細かく震えていた。

「それでいいのか？」

「俺さまが妖怪になつたのはこの枷があつたからだ。俺さまは飼い主の怨念の血に漫り、飼い主に殺された。悪靈となつた飼い主を肅清して俺さまの役割は終る」

「うそ……。こんな大変な役目だつたのか？ いよいよ先に帰つたナスビが羨ましくなつたおれだつた。」

「俺さまが合い図したら行けよ、孝之」

「お、おう」

声が半分裏返つてしまつ。仕方ないよな、おれはただの中学生なんだから。冠をつければ『受験生』。母親は人に会つたびに「家の子が受験生で大変なのよお」と愚痴り、相手は『あら大変だわ～』と返すこの頃。

大変なのはあんたじやなくておれなんだけど そんな事を言つたら瞬殺されそうで言えない。
この世で最強最悪なのは母親じやないかとこつそつ思つていたおれだが……。

『母ちゃん』めん。最悪で最強は今日の前にいます』

次々と前をいく靈を飲み込んで大きくなりながら惡靈は祠に近づいて行つた。

そして 、

「今だ、行けつ」猫又の声がした。

最悪な時間の始まりだつた。

萎えそうになる足を叱咤しながら、おれは走つた。祠に触手を伸ばした惡靈に向かつて声を張り上げる。

「す、すみませ～ん」

いや、待つてくれ。何言つてるんだとか思つのはおれだつて分かつてる。だけどさ、他に何て言う?

氣の抜けた炭酸水みたいなおれの呼びかけは当然無視されると思つたが、幸か不幸か惡靈の動きを止めた。

そしてそれは振り返つた ような気がした。

もっこもこと体が蠢いてこちらに進路を変えるのを見つければ総毛立つた。睡を飲むのつて今までどうやってた? そう思つくらい意識して口に溜まつた唾を飲み込む。

逃げなきやと思うのに膝から下に力が入らない。まるで他人のもののように膝が笑う。

「くそつ、動け。動けよ、足」

見た目はのつそり動いて見えるくせにそいつは案外早かった。

気が付くとおれのすぐ前にそいつは

悪霊は立っていた。

ぐわっとそいつは口を開ける。たちまち魚が腐ったような匂いが広がり、おれは「うげつ」と口を押えてしゃがみ込んだ。

この場合、しゃがみ込むなんて最悪の行動パターンだらう。おれだって映画やマンガを見ていたら「ぱつかじやねえ?」とポテチを齧りながら言つたと思う。

だけど俺は所詮過保護に育つた都会っ子だ。臭い匂いなんて我慢できない。命の危険よりも匂いに反応するあたり、日本人は平和ボケしているという指摘は当たつている。

もうダメか……そう觀念したおれの頭がどかつと踏まれた。こんな酷い目は小学六年の時の運動会で組体操のピラミッドの土台になつた時以来だ。

「痛ててつ

上を見上げたおれが見た物は……猫又のパンツだった。ビリヤラおれの頭を踏み台に使つたらしい。

「靈寶天尊・安慰身形・弟子魂魄・五臟玄明・青龍白虎・隊仗紛紜・朱雀玄武・侍衛我身・急急如律令、我の手により滅失せよ」

耳がきんとなるほどの大聲が響き、猫又が腕を刀のように振りあげると上段から一氣良に降り下ろした。

実体の無い闇に見えていた悪霊の肉を断ち切る音が生々しく聞こえる。ずぶずぶと切りこむほどに筋や腱が断ち切れるぶちんという音が大きく響き、「おおおおおつ……」といつおぞましい悪霊の断末魔がおれの耳を支配した。

この先何年もおれはこの音を繰り返し夢で聞くことになりそうだ。

「ありがとう、孝之。これで俺さまも成仏できる」

突然消えた悪霊に啞然とする俺に猫又がゆつくりとほほ笑んだ。

「え? これで終わり?」

良かつたよな、うん。普通の猫みたいに成仏できるなんぢ。

だけどさ、だけどおれ、なんか寂しくて。

「猫又行くなよつ

「何言つてんだ。」口でさよならするのが一番に決まってる。
ほら、身体も薄くなつてゐるだろ?」
そつなのか? 言つちやだめだと思つながら俺は猫又を見つめた。

結構長いこと。

「あのさ、全然変わつてないぞ」

「へ? うそ」

慌てて自分を見下ろした猫又は「げつ」と唸つた。

「なんかどこかで失敗したみたいだ」

頭をがりがりと搔きながら猫又はにへらと笑つた。涙の別れ
のはずがそつなになかつたのでバツが悪いらしい。

「えつと、一件落着でおれは家に帰るけど……猫又はどうする?」
んんん……と一応考へるフリをしてから猫又はおれを見て笑つた。
何かやな笑いだ。何か企んでいそつた笑みにおれの眉間に皺が
寄る。

「ペットといらないか、孝六。俺さま猫の姿になると超キュートだぞ
ええええええ~?」

おれの受難は去つたわけじや無かつた。足元で体を擦りつけて
くる尻尾が一本ある黒猫を見ながらおれは盛大にため息をついた。

家に帰り、「ご飯の面倒も下の世話も全部おれがします」という
悲しい決意表明の元、猫又は今おれん家の猫になつてゐる。

おれのベッドの半分を占領して丸まつてゐる姿はどこの家猫とも
変わらない。尻尾が一本あるのが不気味だが親は「そこが可愛い
のよねえ、チヨンちゃんは」とか言つてる。

黒猫だからチヨン。まつたく似合わない名前を付けられたもん
だ。しかし猫又ときたら「チヨンちゃん」と呼ばれると「いや
ああ」とどつから声出してんだとこつまど可愛い声で鳴いてみせて
いる。

だが一旦おれの部屋に帰るとどうだ。ベッドの上にぴょんと跳

び乗り居場所を確保すると「孝之」苛ついた声でおれを呼ぶ。

「おまえの母親、遠慮なく触り過ぎだ。禿げになつたらどーする。

注意しとけよ」

偉そうな態度に豹変だ。

こいつがいるせいで厄介事に巻き込まれるはめになること数回。
それでも結構楽しく暮らしているとおれは思ひ。恐ろしくて樂
しいペツトのこる生活もまんざら悪くない。

だけど、

その話は長くなるのでまたの機会に。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1631v/>

猫又と俺

2011年7月31日03時16分発行